



クレドール(金の鍵) 便い

今月号は心に沁みる作文の紹介です。(致知 2023年8月号掲載)

東井義男『子供の心に光を灯す』より 小学一年生の浦島君が亡き母に綴った作文です。

ぼくのむねの中に

「おかあさん、おかあさん」

ぼくがいくらよんでもへんじをしてくれないのです。あのやさしいおかあさんは、もうぼくのそばにはいないのです。

きよねんの二月八日に、かまくらのびょういんで、ながいびょうきでなくなったのです。

いまぼくは、たのしみにしていたしょうがく一ねんせいになり、まい日げんきがかっこうにかよっています。あたらしいようふく、ぼうし、ランドセル、くつで、りっぱなしょうがく一ねんせいをおかあさんにみせたいとおもいます。

ぼくはあかんぼうのとき、おとうさんをなくしたので、きょうだいもなく、おかあさんとふたりきりでした。

そのおかあさんまでが、ぼくをひとりおいて、おとうさんのいるおはかへいってしまったのです。いまは、おじさんおばさんのうちにいます。

まい日がかっこうへいくまえに、おかあさんのいるぶつだんにむかって、「いってまいります」をするので、

おかあさんがすぐそばにいるような気がします。

べんきょうをよくしておりこうになり、おとうさんおかあさんによるこんでもらえるようなよいこになります。

でも、がっこうでせんせい、おとうさんおかあさんのなしをなさると、ぼくはさびしくってたまりません。

でも、ぼくにもおかあさんはあります。いつもぼくのむねの中にいて、ぼくのことをみています。ぼくのだいきなおかあさんは、おとなりのミイぼうちゃんやヨツちゃんのおかあさんより、一ばん一ばんよいおかあさんだとおもいます。

おかあさん、ぼくはりっぱなひとになりますから、いつまでもいつまでも、ぼくのむねの中からどっこもいかにみえてください。

母親に深く愛された記憶は、生涯、この少年を導いてくれる光となったに違いない。
そう願わずにはられません。



クレド訪問看護ステーション

本部 ☎ 072-681-4670

阪急高槻 ☎ 072-609-5208 吹田 ☎ 06-6170-6760